# パリ通信・第157号

## ファン・エイク兄弟「神秘の羊」

1月も半ばに入りヨーロッパ全体がすっぽり寒気団に覆われパリも相当に寒い。とは言えブリュッセルに行く用事があり足を伸ばして、ゲントの聖バーフ大聖堂にあるファン・エイク兄弟の多翼祭壇画「神秘の羊」を見に行った。

パリからブリュッセルはユーロスターで1時間25分、距離にして320km。パリ・デイジョンと同じで、パリからはリヨンよりブリュッセルの方が近い。ブリュッセル・ミデイからゲントまではベルギー国鉄在来線で30分弱。

ブリューゲルの風景画のような寒々とした家々を見ながら一日中マイナス気温のゲントに到着し、急いでトラムに乗り聖バーフ大聖堂に入った。

聖バーフ大聖堂

2012年からIRPA(Institut Royal du Patrimoine Artistique)(ベルギー王立美術遺産研究所)による修復作業が始まり6世紀に渡る汚れ、破損、欠落、加筆削除が行われ1432年当時の鮮やかな色に戻り目を見張るばかりである。

聖バーフ大聖堂はファン・エイク兄弟(兄ユベール1360/70 - 1426)(弟ヤン1385/90 - 1441)が生きた時代には洗礼者聖ヨハネを祀る教会で、聖バーフの名前に変わるのは1540年から、つまり「神秘の羊」が描かれて100年後のことである。防犯や保存の観点から現在ではガラス張りのケースを通して開いた時の図しか見れない。本来は日曜日と特別の日以外は祭壇画は閉じた形で飾られていた。

「神秘の羊」(閉じた時)

開いた時とは対照的な灰色で、最上部に預言者ザカリア、ミカヤと巫女エリュトレイア、中央のパネルに受胎告知、その下に寄進者ジュドキュス・フィエトとその妻エリザベス・ボルルートの肖像画に挟まれて「洗礼者聖ヨハネ」(仔羊を抱いた老人)と「聖ヨハネ」(マムシの杯を手にした若いヨハネ、ヨハネの黙示録を書く)が描かれていることからも祭壇画の起源が分かる。寄進者フェイトはゲントの裕福なブルジョワでゲント市の行政に長く関与し教会にも多額の寄進をした有力者である。閉じた形の祭壇画が見れな

いのは残念である。
15世紀初頭のゲントはブルージュ、ブリュッセルと並んで織物産業でヨーロッパ一栄え、デイジョンで生まれた第3代ブルゴーニュ候「フィリップ・ル・ボン」(善良公フィリップ3世)(1396-1467)の領地だった。1419年フランス王シャルル7世支持者に父親を暗殺されたフィリップ3 世は百年戦争中のイギリスと手を組み、シャルル7世の失脚を願うがジャヌダルクの力でシャルル7世がフランス王に即位する。1467年ブルージュで死ぬまでの47年間ブルゴーニュ公として揺るがぬ財力と権力で領地を納め、「神秘の羊」を筆頭に初期フランドル絵画の頂点を支えた人である。「神秘の羊」は1985年までフィエト礼拝堂に飾られており、「フィリップ・ル・ボン」の息子の洗礼時にはこの「神秘の羊」が開かれたのである。

全部で20のパネルから成る「神秘の羊」は画布ではなく樫の板絵だ。膠と何層にも塗った下地塗りを経て描かれ、「油彩」の技術を完成させたのがこの「神秘の羊」である。祭壇画を開いた時の美しさはこの世のものとは思えない。生きた羊の胸の傷から流れる血は祭壇の杯に注がれる。人類の罪を贖う羊はキリストであり「聖体の秘跡(ユーカリスト)」を暗示し、手前の8角形の井戸は「生命の水」として洗礼を意味する。「神秘の羊」は12人の天使たちに囲まれ、後方の4人の手には「キリスト鞭打ちの柱」「十字架」「槍」「荊の冠」がキリストの受難を語っている。羊が置かれた野には天国のような草花が咲いている。40種類以上の草花が細部まで極めて正確に描かれている。左下の旧約聖書の人物、右手には新約聖書の使徒たち、右上には聖女たち(羊を抱いた聖女アニエス、塔を手にした聖女バルバラ、車輪の聖女カトリーヌ、花籠を持った聖女ドロテなど)人物も風景もその表現の緻密さとリアリティはファン・エイク兄弟以後の画家たち全てに影響を与えた極めて重要な作品である。

16世紀の宗教戦争の破壊を免れ、ナポレオン時代にはパリに剥奪され、ゲントに帰還後もプロセイン王フリードリッヒ・ウイルヘルム3世に買い取られ、第二次世界大戦でナチスに没収されるも連合軍アメリカの手でベルギーに帰還した「神秘の羊」。裸のアダムとイヴには服が描き加えられたり、ドイツではノコギリで縁を削られたりと6世紀に及ぶ受難を乗り越えて今日修復を終えて聖バーフ大聖堂に飾られているのは奇跡としか言いようがない。
教会に入り毛糸の帽子と手袋を脱ごうとしたら係りの人が寒いから着けたまま入っていいですよと親切に声をかけて下さった。予約をして行ったが私以後には2〜3組の人しかいない。さすがにこのフランドルの寒さに観光に来る人もいないのは当然だった。

（古賀順子記）

編者から。
古賀さんの観察眼と知識には敬服します。私も偶然に「神秘の羊」が開れる時にこの地に旅をして鑑賞しましたが、こんなに細部までは私の目では見ることができませんでした。癌を患っていた弟（召天）が私にお土産にこの「折りたたみ画」を買ってきてくれました。彼に思うところがあってのことだと考えています。（小原靖夫記）